



# *International Student Center News*

金沢大学留学生センター ニュース

vol. 6

March 2003



# ことゆた 古都の豊かさ

ほり ぼやし たくみ りゅうがくせい ちよう  
堀 林 巧 (留学生センター長)

大不況期にルーズベルト大統領の下でニューディール政策に携わり、戦後ケネディ政権時代に政策スタッフ及び駐インド大使を務めた米経済学者ジョン・ケネス・ガルブレイスは、敗戦直後の日本を調査団の一員として訪れて以来、何度も再訪を繰り返してきたが、彼の近著に金沢に触れたくだりがある。少し長くなるが引用する。

「なかでももっとも印象深かった日本への旅行は、忘れもしない1990年の秋に、日本海側の古都・金沢を訪れた時である。金沢の町に足を踏み入れた瞬間、私は思わず息を呑んだ。一すばらしい文化と学問・芸術から期せずして発散れている香気が、町全体に満ち満ちていたのだ。金沢では、かつての大家の庭園がそのまま市民の憩いの場としての公園になっており、そこを覆う滴のような緑を中心として、町全体、いや地域全体が深い大自然としっかり溶け合っているのだ。水も、空気も、あくまで清冽に澄み切っており、人々の表情も実に穏やかで幸せそのものであった」(ジョン・ケネス・ガルブレイス『日本経済への最後の警告』徳間書店、2002年、223-225ページ)。

高度成長を経て日本の美しい街並みは均一・無機質なものに変貌したとする彼は、この国の経済復興と成長はケインズ学派(ケインジアン)のデザインによるところが大きかったものの、そのケインジアンは「文化の香り」などといった「数字や物差しではとうてい計りきれない類のもの」には「実に無関心だったのではないか」(前掲書、225ページ)と問いかけながら、成長による均一化への変貌を免れた幸運な古都・金沢について上のように述べているのである。経済学の歴史の素養のある人ならガルブレイスの成長観と「定常状態」(経済発展停止状態)を悲観的に捉えない19世紀の経済学者ジョン・スチュアート・ミルの議論の類似性を指摘するところであろう。ガルブレイスは不況の現在日本に対してGDPの成長「再開」ではなくて「生活が深く、多彩に楽しめる」社会作りへと「施策の視点をかえる」よう提言している(『朝日新聞』2003年1月23日付)。

かつてニューディール政策に携わったガルブレイスは「景気回復」の「方法」を熟知していることであろう。しかし、94歳になる彼は、学問・芸術・文化・自然との融合が人間の生の「目的」であることをそれ以上に知っていることであろう。

私も欧州の旅先で、古都の醸し出す(経済成長とは別の)豊かさに触れ人生の喜びを感受することがある。留学生が日本で、日本人学生が外国で、そのような機会を多く持てることを望む。そして、金沢大学が古都にふさわしい「学問の香り」を漂わせているかどうかを絶えず問いかけていたいと思う。

りゅうがく せい

# 留学生センターのホームページを知っていますか？

皆さんは留学生センターのホームページを見たことがありますか？センターの提供するコースの紹介や時間割などが載っています。

日本語版（下図）のほかに、ほぼ同じ内容の英語版もあります。

ほかの留学生にもぜひ教えてあげてください。

日本語版 URL

<http://www.kanazawa-u.ac.jp/~ryugaku/>

英語版 URL

<http://www.kanazawa-u.ac.jp/~ryugaku/eg/kuisc.html>





# にほんごけんしゅう 日本語研修コース

## しよきゅう せんもん にほんご ゼロ初級から専門日本語へ

日本語研修コースでは、留学の目的達成を支援するために、様々な工夫をして、大学でしかできない、大学でこそ行うべき日本語教育を目指しています。

このコースには、研究留学生と教員研修留学生がいます。研究留学生は、修士号や博士号をとるために日本へ来た留学生です。教員研修留学生は、国で小、中、高校の教師をしている人たちが、日本で1年間の教員研修をします。ほとんど何も日本語を勉強しないまま日本へ来て、このコースで半年（17週間）の日本語集中トレーニングを受け、半年後には専門の研究に入らなければならないのです。

考えてみてください。たとえば、あなたが大学卒業後、アラビア語を話す国に行き、アラビア語を初歩から始めて、半年後に専門課程に進学して、アラビア語で講義を受け、文献を読み、アラビア語でゼミ発表ができるでしょうか。ほとんど不可能なように思えるでしょうか？そのようなことを、このコースの留学生たちはやっているのです。

日本語研修コースは、それを可能にするために、頑張っているコースです。

日本語の初級の文法・文型とそれを応用したコミュニケーションのとり方、初歩の読み書きなどの一般日本語が、コースの主勉強です。それだけなら、どこで勉強しても同じに思えますが、このコースは、常に「専門への橋渡し」を意識している点で、大学の日本語教育としての性格を打ち出しています。

留学生一人一人の専門に立ち入った教育は、日本語の教師にはできませんが、専門につながる、専門の一手手前の教育を行おうとしています。すなわち、専門領域で使われる科学的な文章の型、一般的な科学的語彙などを意識的に教育の中に取り入れ、フォーマル・インフォーマル、話し言葉・書き言葉の区別などに対する学生の意識を高めます。

プレゼンテーション教育も大きな特徴です。日本語のコンピュータソフトを使ったデータ入力や分析方法、画像や音声などの取り入れ方などを指導し、留学生はそれぞれの国の紹介発表をパワーポイントを使って行います。研究発表も行います。一人一人の興味にもとづいて、小さなテーマを決め、アンケート調査を行い、結果を分析して、パワーポイントを使って口頭発表します。今までに100名を超える留学生が、立派な口頭研究発表を行いました。また、学期の終わりごろには、専門課程のシミュレーション講義も行います。



2003年度には、専門課程での日常生活が円滑に行えるように、金沢大学の「研究室文化：研究室でのコミュニケーションの秘訣」プロジェクトを始める予定です。

大学院予備教育日本語研修集中コース  
（略して日本語研修コース）担当：三浦 香苗

# 日本語・日本文化研修コース 里親プログラム

## 国境を越えた親子関係への挑戦

金沢大学日本語・日本文化研修コースの里親プログラムは発足から4年目を迎えました。日本の家庭生活を体験することによって、教室では決して教える事の出来ない日本を自ら発見する機会を日研究生（日本語・日本文化研修生）に与えることがこの交流プログラムの一つの重要な目的です。しかし、日本に対する表面的な知識を得る機会に留まることなく、1年間に渡る交流を通して、「日本の親」と「日研究生の子」としての国境を越えた親子関係の実現を目指して、試行錯誤が繰り返されています。

この交流プログラムは、大学と田上公民館の主催の下実施しており、大学所在地である田上地区の住民が結成している「田上の会」の参加者中心に里親をお願いしています。発足1年目から継続的に里親になっていただいている家族も多く、交流プログラムとして徐々に定着しつつあると言えます。

しかし、真の「親子関係」の実現は決して容易なものではありません。日研究生の留学期間が1年間と短いので、深い関係を築くことは時間的に困難であるというのがその一つの理由だと考えられます。上記のような物理的な条件を別にしても、真の交流を妨げている要因として日研究生と里親の相性問題や異文化間交流に関わる様々な問題などが挙げられます。

異文化間交流に関わる問題は多少の予備知識を与えることで防げるものもありますが、考え方や生活習慣の些細な違いによって引き起こされるものもあります。里親の長期入院の時にお見舞いに行きたかったのに、「心配する必要はないから」と断られ、ある日研究生が大きなショックを受けたことをその一例として挙げられます。その日研究生は、自分の国では「身内」が入院した時に、みんなで病院に駆けつけて元気付けることが当たり前のことなのに、どうしてお見舞いさせてもらえないかと悲しがっていました。日本では人に迷惑をかけないことが美德とされ、迷惑をかけてもいい仲とされるのは家族やウチの延長線にある極僅かな間柄だけであるということは留学生にとっては理解し難いことであり、また受け入れ難いことでもあるようです。

また、多くの留学生にとって日本的人間関係の形成の仕方は大変理解しにくいもの





です。日研生は里親に多くを期待し、初めから馴れ馴れしい態度で接します。外国人だからと言って許されることも多いとは言え、初対面の日から親子関係が成立することは到底望めません。しかし、日研生の観点からすると、渡日前から待ちに待った里親との出会いで

あり、直ぐに「お父さん」「お母さん」になってほしいと思うのも無理がありません。よい関係を築くために時間が必要であり、いくつもの壁を段階的に乗り越えていかなければならないことを理解し、受け入れるようになるには日本文化に相当馴染まなければなりません。

幸いなことに毎年入れ替わる日研生と違って、継続的にプログラムに参加してくれている里親が多いです。日研生の異なる生活習慣や考え方を自然に受け入れ、彼らの期待に応えながら、一年間日本の親を務めてくださる家族も徐々にとは言え、着実に増えています。一つ一つの心の壁を確実に乗り越え、帰国後も続く、時間や距離に阻まれない里親との真の親子関係の形成こそが、日研生にとって最大の日本文化研修だと考えています。国境を越えた親子関係が自然な形で実現するようになるまで、新たな試みを取り入れながら、プログラムの充実を図っていきたいと思います。

日本語・日本文化研修コース担当：ルチラ パリハワダナ



# 総合日本語コース

総合日本語コースでは今学期、角間キャンパスで79名、小立野キャンパスで46名、計125名が日本語クラスを履修しています（このうち留学生センター所属の学生は46名で約3分の1を占めています）。

留学生たちの目に、日本人学生はどのように映っているのでしょうか。彼等の作文から少し引用してみましょう。

◎「日本に来る前、日本人学生について、私はこんなイメージを持っていた：勤勉・真面目・努力家・勉強好き・図書館で勉強ばかり。なぜかという、母国の大学の先生が『日本人の会社員は仕事に夢中だ』『日本の高校生たちは、難しい大学入試のために一生懸命勉強している』と言ったからだ。『会社員は真面目、高校生も真面目、それなら大学生も真面目だ』と私は思っていた。しかし日本に来て日本人学生を近くから見ると、彼等は私が思っていたほど勤勉・真面目ではない」

◎「日本人学生は授業中先生に『質問がありますか』と聞かれても全然聞かないから、私も時々質問をするとき、恥ずかしく感じる。日本人学生は先生の目を直接見ないことも分かった。私の国では、目を直接見ないで話したら、それは何か悪いことをしたので恥ずかしく感じているからだと思われる。日本人学生は私の国の大学生と比べたら、とてもおとなしくて静かだと思おう」

◎「教授がある学生に、辞書である単語を調べるように言った。その学生はしばらく捜してから『載ってない』と答えた。『載っていません』ではなく『載ってない』と…。僕はびっくりした。どうして学生が教授に無礼な言葉を用いるのだろうか。僕の国では絶対にあり得ないことだ。そんなことが何回か授業中にあった。また、教室に入ったとき教授にあいさつするのも僕だけだった。尊敬語がよく発達した言語を持っている日本人学生が、どうしてそんな話し方をするのか。それは全くの謎であった。

もう一つの不思議なことは図書館のことだ。僕の国では図書館はいつも学生で一杯になっている。ところが、日本の大学の図書館はいつも空いていた。日本人の学生たちは一体どこで勉強しているのだろうか。家でしているのか、それとも全然しないのか。多分家でちゃんと勉強しているのだと思おうが…」

さて、彼等の「日本人学生像」は現実の姿と合っているのでしょうか。日本人学生の皆さん、反論のある人、「謎」を説明してあげられる人、私たちに連絡してください！

総合日本語コース担当：長野 ゆり



# かなざわだいがくたんきりゅうがく 金沢大学短期留学プログラム

## にほんぶんかたいけん 日本文化体験

かなざわだいがくたんきりゅうがく  
金沢大学短期留学プログラム (KUSEP) の  
さまざまなコースの中で、特に高い人気を集  
めているのは「**日本文化体験**」というコース  
です。一年間の留学生活で、学生は前期と後期  
に分かれて、さまざまな日本文化並びに金沢  
ならではの文化に接することができます。  
前期の日本文化体験コースは「茶道」、「華道」、  
「金箔」や「陶芸」、後期は「座禅」、「紙漉  
き」「そばうち」や「漆芸」などに挑戦をし



す。これらの体験講座は一回ないし数回にわたって行われます。今年で5年目を迎えますが、  
講師として金沢はもちろん、日本全国ひいては世界的に著名な方々の協力をいただいています。  
ここでは、**第4期生** (平成13年10月～平成14年9月) の「**日本文化体験**」を紹介しましょう。

「**茶道**」体験は金沢市内の「**園邸**」という大正時代に建てられた民家を使って行われました。  
中庭があって建物自体も印象的で、学生はお菓子を食べ、お茶を飲みました。正座に戸惑って  
いる学生も多くいましたが、**上野且見先生**の指導のもと希望者はお点前にも挑戦しました。

「**華道**」では、野に咲く植物に目を向けました。金沢大学の角間キャンパスの里山に散歩に出  
かけ、材料を集め、**広岡治樹** (華林) 先生に教えていただき、自分で簡単な花器を作って、花  
や木の枝を生けました。

「**金箔**」は金沢にある「**金箔体験教室**」に参加しました。学生は自分自身でデザインをし、箱  
やお盆などに金箔を貼る作業を行いました。

「**陶芸**」の講師を務めていただいたのは**大樋焼き**の陶芸家**大樋年雄氏**でした。大樋先生は自分  
の留学経験も活かし、お茶碗の作り方を丁寧<sup>ていねい</sup>に教えてくださいました。柔ら  
かい土から形を作り上げ、最後に窯の中<sup>なか</sup>から灼熱している作品が取り出され、  
急激<sup>きゅうげき</sup>に冷やされる過程<sup>かてい</sup>で上薬<sup>じやうやく</sup>の色<sup>いろ</sup>が出  
てくるのに感動<sup>かんとう</sup>させられました。



「**座禅**」を組んだのは金沢の「**大乘寺**」  
です。壁に向かつて約40分間の静かな  
体験でした。ちょうどその時イギリス



しゅっしん そう ぜん ぎ ぜん せつめい あ くだ  
出身の僧が禅や座禅の説明に当たって下さり、  
がくせい ぜん であら せい かつ  
学生は禅寺での生活などについていろいろな  
しつもん きょうみ  
質問をし、興味しんしんでした。

かみ す かな ざわ し こう がい ふた また まち  
「紙漉き」は金沢市郊外の二俣町にある  
ふる きと かい かん おこな  
「古里会館」で行いました。網を張った  
かく しゅ かつ わく つか みず と かし た わ し の げん りょう  
各種型枠を使って、水に溶かした和紙の原料  
す しよく ぶつ きん ぎん ぱく  
を漉き、そこに植物のをせたり、金銀箔をち  
らしたり、色をつけたりして、自分の和紙を  
かん せい  
完成させました。



「そばうち」は「金沢市キゴ山ふれあいの里研修館」で実施しました。そば粉を練り、棒で延ばして、包丁で細く切り、湯であがったそばを皆で食べました。

しつ げい いし かわ けん りつ やま なか しつ き さん ぎょう ぎ じゅつ すう かい たい げん  
「漆芸」は「石川県立山中漆器産業技術センター」で数回にわたって体験しました。ろくろ挽き・塗り・蒔絵、それぞれの専門講師の説明を受け、手本を見ながら器を造り、朱や黒の漆を塗り、金粉銀粉を使い蒔絵に挑戦しました。

りゅうがく せい に ほん ぶん 文化 たい げん にん き ひ みつ  
留学生にとって日本文化体験コースの人気の秘密とは、ただ日本文化についての講義を聞くことだけではなくて、実際に身をもって体験をすること、あるいは自分の手でものを作って、その完成したものを自分の国に持ち帰ることができることかもしれません。

たん き りゅう がく たん とう おか ざわ たか お  
短期留学プログラム担当：岡澤 孝雄、ビットマン ハイコ



# 日韓共同理工系学部留学生コース

(通称：日韓プログラム) 第3期

第3期から、日韓プログラムに理学部6学科のうち4学科が加わりました。参加1年目でさくそく物理学科に1名(チェ・ジョンウォン君)の配置がありました。そのほかにも、第2期と同様、工学部の情報システム工学科にイ・ソンミン君、電気電子システム工学科にイ・ヒョクジョン君の配置がありました。

第3期は来日の遅れが大幅に解消されて、10月11日に富山空港経由で到着しました。

第2期までは約1ヶ月の遅れだったことに比べれば、プログラムの運営上ロスが少なく済んだと言えます。

第3期から新たに始めた活動としては、「プレゼンテーション」があります。これは、第1期から「口頭発表」としていた授業を、より個人の意思を反映した形での発表にしたものと言えます。

前半期(2002年10月~12月)に「私の国・韓国発表」というプレゼンテーションをすでに一度行いました。3人が次のように分担して担当しました。

「国の象徴」「歴史」「ハングル」「地理」「DMZ(非武装地帯)」:イ・ソンミン君(写真左)

「伝統的な家の構造」「服」「料理」「仏国寺」:チェ・ジョンウォン君(写真中)

「テコンドー」「テッキョン」「遊び・踊り」「映画」:イ・ヒョクジョン君(写真右)



そして後半期(2003年1月~3月)の3月4日に、今度は3名がそれぞれ選んだテーマに基づいて発表を行います。テーマは「音声認識技術について」(イ・ソンミン君)、「ビデオゲームの歴史と未来」(イ・ヒョクジョン君)、「ニュートリノについて」(チェ・ジョンウォン君)です。現在、各自が必要なる情報を懸命に収集しています。これからは収集した資料をアウトラインにはめこみ、プレゼンテーションスライドを作成して、原稿作成、発表練習へと進みます。3人とも自分の専門や関心の最も高いテーマを選んだので真剣そのものです。どんな発表となるでしょうか。今から本番が楽しみです。

なお、この口頭発表は、大学院予備教育の「ハイブリッド・ドラマプロジェクト」と合同で行われます。

速報：原稿作成中に第4期生の配置がありました。第4期からは配置方法がまったく変わってしまい、先に配置大学を決めてから韓国側の前期予備教育に入る形になります。金沢大学には第4期も3名の配置がありました。内訳は、理学部数学科1名、工学部電気電子システム工学科1名、同学部人間・機械工学科1名です。

日韓プログラム担当：太田 亨



後方中央の3人が3期生  
前列左は2期生のキム・ソツプ君（富山空港にて）



# 相談指導部門

チューター制度を知っていますか？ チューター制度を活用していますか？

「〇〇さんのチューターはとても熱心に指導してくれる」あるいは「チューターともしっかりとたくさん会う機会があったらいいのに」など、留学生の身近にいるチューターは、留学生どうしの話題になります。

留学生生活をより充実させるには、チューター制度を良く理解して、チューターとともに学生生活を送ることが大切です。特に、日本に来たばかりの留学生や、短期間だけ日本の大学で学ぶ留学生にとって、チューターは様々な事を教え、サポートしてくれる「重要な他者」です。

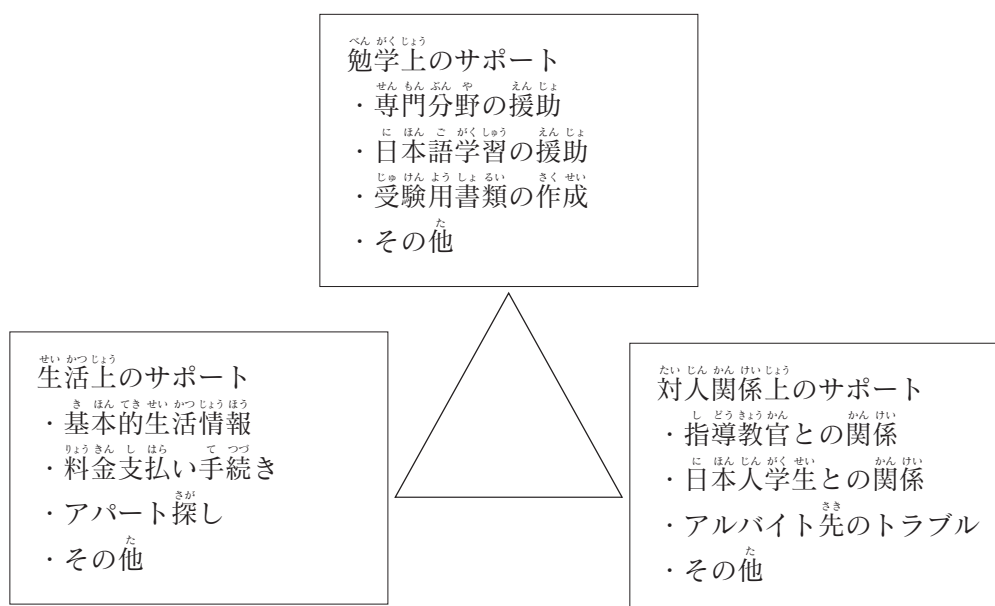
## 1. チューター制度について

チューター制度とは「指導教官の指導のもとに、大学が選定したチューターにより、教育・研究について個別の課外指導を行い、留学生の学習・研究効果の向上を図ることを目的とする」ものです。したがって、留学生のチューターとなる人は、原則として留学生の専攻する分野と関連した学問や研究をしている日本人学生・大学院生です。

チューターは、留学生の学習・研究面について、予習・復習はもちろん定期試験などの指導を積極的に行います。これがチューターの中心的な役割です。このような学習・研究面でのサポートに加えて、日本語の指導や留学生の生活全般に渡る指導や援助も行います。

## 2. チューターの役割：チューターはどんなサポートをするのでしょうか？

チューターの役割は、図の通りです。



「<sup>べん がくじょう</sup>勉強上のサポート」が中心になりますが、「<sup>ちゆうしん</sup>生活上のサポート」や「<sup>たいじんかんけいじょう</sup>対人関係上のサポート」も行います。

図の中の「サポート」でどこを<sup>じゆうてんてき</sup>重点的にするかは、<sup>りゅうがくせい</sup>留学生によって<sup>ちが</sup>違います。一人一人の<sup>りゅうがくせい</sup>留学生の<sup>ようきゅう</sup>要求に合った<sup>あ</sup>チューター活動<sup>かつどう</sup>が出来るように、<sup>ちゆうたあ</sup>チューターは<sup>しどうきょうかん</sup>指導教官と<sup>そうだん</sup>相談しています。

<sup>りゅうがくせい</sup>留学生も必要な「サポート」を<sup>ちゆうたあ</sup>チューターに<sup>つた</sup>伝えてください。

### 3. <sup>しどう</sup>チューターの<sup>う</sup>指導が<sup>りゅうがくせい</sup>受けられる<sup>りゅうがくせい</sup>留学生のタイプ

大学にいるすべての<sup>りゅうがくせい</sup>留学生が<sup>しどう</sup>チューターの<sup>う</sup>指導を受けられるのではありません。

<sup>しどう</sup>チューターの<sup>う</sup>指導が<sup>りゅうがくせい</sup>受けられる<sup>りゅうがくせい</sup>留学生は次の通りです。

- ① <sup>がくぶせい</sup>学部<sup>せい</sup>正規<sup>せい</sup>学生 <sup>と</sup> 渡日<sup>こ</sup>後、<sup>さいしよ</sup>最初の<sup>ねん</sup>2年間
- ② <sup>だいがくいん</sup>大学院<sup>せい</sup>正規<sup>せい</sup>学生<sup>お</sup>および<sup>けんきゅうせい</sup>研究生 <sup>と</sup> 渡日<sup>こ</sup>後、<sup>さいしよ</sup>最初の<sup>ねん</sup>1年間
- ③ <sup>にっかんきょうどう</sup>日韓<sup>り</sup>共同<sup>り</sup>理工<sup>がく</sup>系<sup>ぶ</sup>学部<sup>りゅうがくせい</sup>留学生 <sup>と</sup> 渡日<sup>こ</sup>後、<sup>さいしよ</sup>最初の<sup>ねん</sup>2年間
- ④ <sup>かなざわ</sup>金沢<sup>だいがく</sup>大学<sup>たん</sup>短期<sup>き</sup>留学<sup>りゅうがく</sup>プログラム (KUSEP) <sup>せい</sup>生

### 4. <sup>れんらく</sup>チューターと<sup>れんらく</sup>連絡をとっていますか？

<sup>かなざわ</sup>金沢大学での<sup>りゅうがく</sup>留学を終えて<sup>お</sup>帰国した<sup>りゅうがくせい</sup>留学生の<sup>ちゆうさ</sup>調査によると、<sup>ちゆうたあ</sup>チューターと<sup>よ</sup>良く<sup>れんらく</sup>連絡をとって、<sup>いっしょ</sup>一緒に<sup>べんきょう</sup>勉強や<sup>かつどう</sup>活動した<sup>りゅうがくせい</sup>留学生たちは、<sup>りゅうがくせい</sup>留生活にと<sup>まんぞく</sup>とても満足している事が分かります。<sup>ちゆうたあ</sup>チューターと<sup>した</sup>親しくな<sup>ちゆうたあ</sup>って、<sup>いえ</sup>チューターの<sup>と</sup>家に泊まりに行ったり、<sup>りょうり</sup>料理を作ったりすることはもちろん、<sup>なか</sup>中には<sup>かいがい</sup>海外にも<sup>いっしょ</sup>一緒に<sup>で</sup>出かけたりするケースもあります。

しかしその<sup>はんたい</sup>反対に、「<sup>ちゆうたあ</sup>チューターとなかなか<sup>あ</sup>会<sup>なげ</sup>うことができない」と<sup>りゅうがくせい</sup>嘆く留学生や、「<sup>だれ</sup>誰が<sup>ちゆうたあ</sup>チューターなのか<sup>わ</sup>分からない」という<sup>りゅうがくせい</sup>留学生もいます。その<sup>ばあい</sup>場合には<sup>しどうきょうかん</sup>すぐに、「<sup>しどうきょうかん</sup>指導教官」や「<sup>しよぞく</sup>所属する<sup>がくぶ</sup>学部・<sup>けんきゅうか</sup>研究科の<sup>たんとうけい</sup>担当係」または「<sup>りゅうがくせい</sup>留学生センター」まで<sup>れんらく</sup>連絡してください。皆さんの<sup>ちゆうたあ</sup>チューターの<sup>なまえ</sup>名前と<sup>れんらく</sup>連絡先が<sup>かんたん</sup>簡単にわかります。

また、「<sup>ちゆうたあ</sup>チューターには、<sup>い</sup>こんなことを<sup>えんりよ</sup>言<sup>りゅうがくせい</sup>ってもいいのだろうか？」と<sup>えんりよ</sup>遠慮する留学生も見られます。しかし、<sup>こま</sup>困<sup>まよ</sup>ったり迷<sup>おも</sup>ったりすることがあ<sup>おも</sup>ったら、<sup>おも</sup>思い切<sup>はな</sup>って<sup>ちゆうたあ</sup>チューターに<sup>はな</sup>話してみたらどうでしょう。<sup>おお</sup>多くの<sup>いっしよけんめい</sup>チューターは、<sup>みな</sup>一生懸命に<sup>い</sup>皆さんの<sup>き</sup>言うことを<sup>き</sup>聞いてくれるはずで<sup>す</sup>。そして、「<sup>りゅうがくせい</sup>留学生に<sup>ひつよう</sup>必要と<sup>おも</sup>されたい」と<sup>おも</sup>思っている<sup>ちゆうたあ</sup>チューターが<sup>おおせい</sup>大勢いることを<sup>わす</sup>どうぞ、<sup>わす</sup>忘<sup>わす</sup>れな<sup>い</sup>いでください。

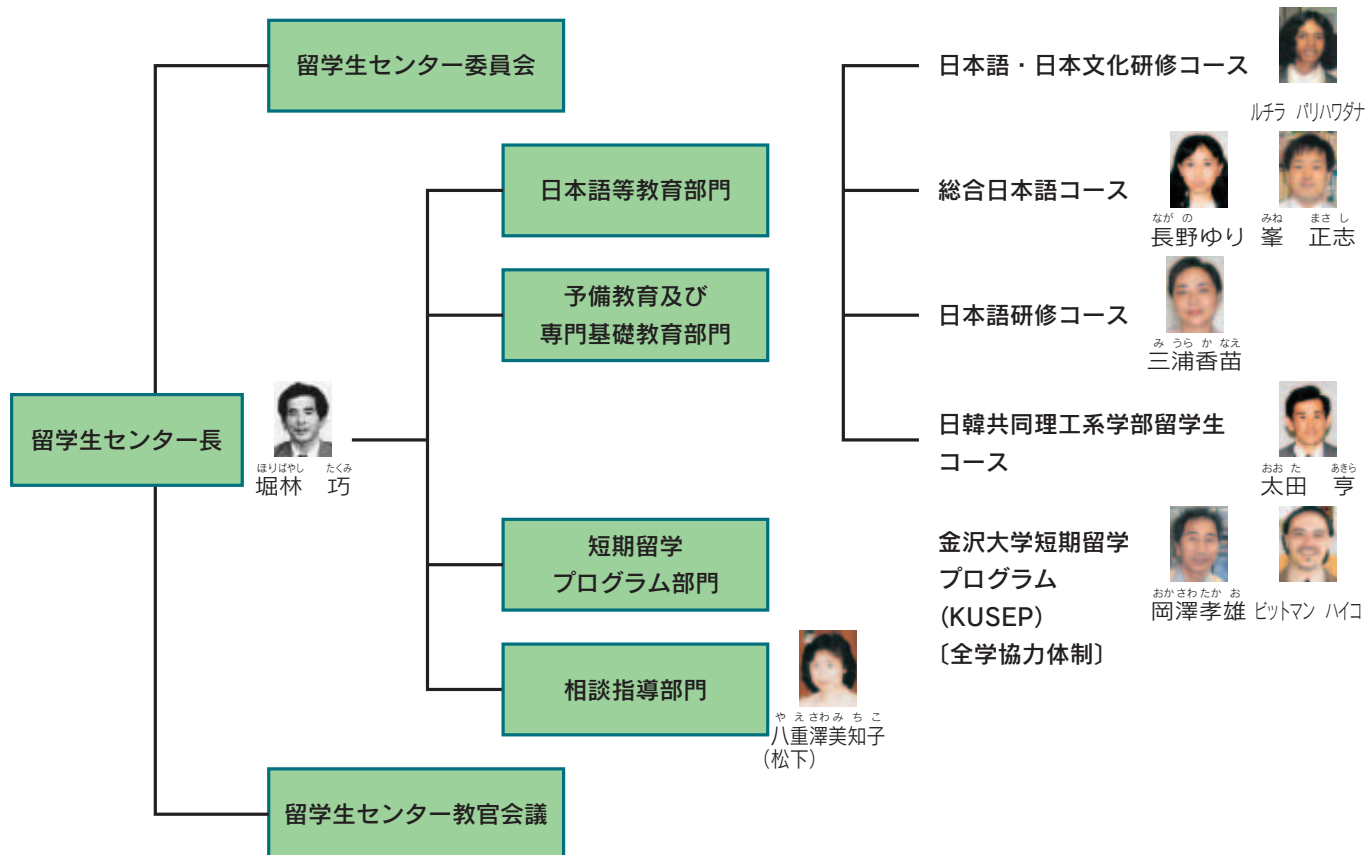
<sup>そうだん</sup>相談<sup>しどう</sup>指導<sup>ぶもん</sup>部門<sup>たんとう</sup>担当：<sup>やえざわ</sup>八重澤<sup>まつした</sup>（松下）<sup>みちこ</sup>美知子



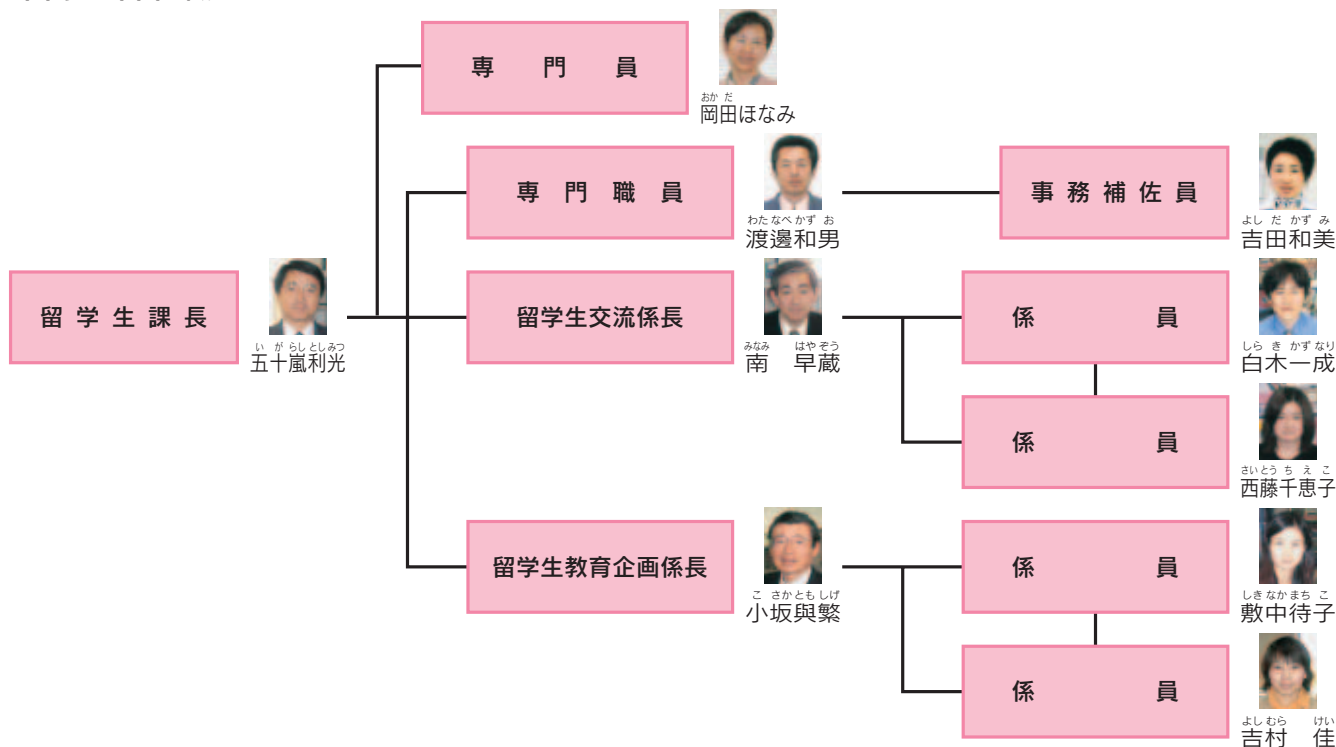




## 留学生センター組織 (2002年度)



## 留学生課組織



### 金沢大学留学生センターニュース 第6号

2003年 3月31日発行

発行 金沢大学留学生センター

〒920-1192 金沢市角間町

TEL (076) 264-5188

FAX (076) 234-4043

s-ryuukikaku@ad.kanazawa-u.ac.jp